城西大学
スポーツ
JOSAI UNIVERSITY JU
■発行所　〒350−0295　埼玉県坂戸市けやき台1−1　城西大学
城西大学の題字は創立者・水田三喜男先生

女子ソフト　関東春季初制覇
強豪・山梨学院大降す

埼玉県毛呂山町大類ソフトボールパークで行われた第６回関東学生女子ソフトボール春季リーグ戦（５月３〜５日）で、城西大学は山梨学院大学の４連覇を阻止し、初優勝を果たした。

Jスポ

初戦の関東学園大戦では相手チームにランナーを出させ、ピンチを迎える場面が何度かあったが、踏ん張りをみせ1対1の同点で試合を終えた。その後は順調に勝利を重ね、最終戦の清和大学戦では7対0と大量得点をとり5回コールド勝ち。結局、4勝1分けの成績で優勝を決めた。

リーグ戦のハイライトは4戦目、優勝候補の山梨学院大学戦だった。両大学とも先発ピッチャーは1年生。城西大学の金澤麻美（現代政策1）は相手チームを1点に抑える好投。一方、打撃陣も好調で相手ピッチャーは次々と交代し3人が投げてきたが、打ち崩し、6対1でこれまで一度も勝てなかった山梨学院大学に勝利した。

今大会には1年生が活躍した。木村美奈都（経営1）、中島芹香(経営1)、対馬弥子（経営1）らだ。3人は「大学生初の公式戦となる大会だけに緊張したが、失敗を恐れず思い切ってやろうという気持ちで臨んだ。先輩たちに負けない若さで明るく元気に、を心がけた」などと話した。

長澤淑恵監督は、試合を振り返り「春のリーグ戦は、主力選手が現4年生の新チームになり、初の公式戦だった。冬のトレーニングの成果を出すために結果にこだわって大会に臨んだ。新入生の計算外の活躍という嬉しい誤算もあり、また運も味方につけた。ずば抜けた選手はいないが、総合力で他のチームより勝った。みんなで勝ち取った優勝である。追われる立場となり、次の優勝は簡単なことではないが、勝ちにこだわっていきたい」と話す。

【安富英里香】

▶春季リーグ戦初優勝を果たし晴れやかな笑顔をみせる部員たち

名前	学部	学年	出身高
酒巻ひかる（キャプテン）	現代政策	4	千葉経済大学付属高
室谷亜実（副キャプテン）	経営	4	藤村女子高
野村美和子	経営	4	日出高
吉田千明	経営	4	双葉高
江口真未	現代政策	4	淑徳高
塩野梨沙	現代政策	4	朝霞西高
小林瑞穂	経営	4	前橋育英高
塚本典子	経営	3	細田学園高
比嘉智奈美	経営	3	保谷高
福地梓	経営	3	日本大学三島高
佐久間藍	経営	3	佐野女子高
細井沙由美	経営	3	武蔵越生高
高橋裕未	経営	3	尚志高
高下ちなみ	経営	2	保谷高
高野美智子	現代政策	2	藤村女子高
佐々木敦子	理	2	春日部女子高
八代裕衣	経営	2	桜華女学院高
保崎麻優	経営	2	細田学園高
中島芹香	経営	1	埼玉栄高
朴乾珠	短期	1	江南女子高
木村美奈都	経営	1	藤村女子高
宋允雅	短期	1	江南女子高
岡本昌代	現代政策	1	上尾高
齋藤彩美	経営	1	浦和商業高
金澤麻美	現代政策	1	花咲徳栄高
田上沙也加	経営	1	山梨学院大学付属高
對馬弥子	経営	1	花咲徳栄高
李慧娟	短期	1	江南女子高
小川奈美（マネージャー）	現代政策	2	川越市立川越高

女子ソフトボール春季リーグ戦成績

城西大　1−1　関東学園大　　城西大　6−1　山梨学院大
城西大　4−1　東海大　　城西大　7−0　清和大
城西大　5−4　淑徳大

1位 城西大／**2位** 山梨学院大／**3位** 関東学園大／**4位** 淑徳大／**5位** 東海大／**6位**清和大

あっぱれ！インタビュー

チームワークで勝利導く

キャンプテンであり1番バッターの酒巻ひかる（現代政策4）、4番バッターの室谷亜実（経営4）、エースピッチャーの野村美和子（経営4）とインタビュー。

——新チームになり初の公式戦となる今大会へはどのような気持ちで臨んだか。

酒巻　試合前チームの調子がよくなかったので、雰囲気を大事に良い雰囲気で1試合1試合全力でやろうという気持ちで臨みました。

室谷　リーグ戦はトーナメントと違い総当たりなので、1試合目が大事とチームで話し、ビデオで研究したりして準備をしっかりして試合に臨みました。1試合目は引き分けでしたが、その後初めて山梨学院大学にも勝ち、チームが活気づきました。

野村　4年生にとって最後のリーグ戦、そしてピッチャーなので全部の試合を投げなきゃいけないという責任感を持ちながら、全試合投げ抜きなおかつ勝つことにこだわって臨みました。

——印象に残っている試合、シーンは？

3選手　練習の成果が発揮できたのは、淑徳大学戦で、毎日練習していた難しい連携プレーが成功したことが本当に嬉しかった。勝利の秘訣はチームワークです。

——インカレなど今後の試合への意気込みをお願いします。

酒巻　どんな状況でも負けないくらい練習しているので、自信を持って臨みたいです。リーグ優勝をしたチームとして、まぐれと言われたくないので優勝は譲れません。

室谷　監督からも言われましたが、リーグ優勝し追われる立場になり相手は思い切って挑んでくるのでそこを簡単に崩されるようなチームではないという気持ちを持ち、まずはインカレ出場の権利を獲得し、その後のトーナメントも勝ちを目指してやっていきたいです。

野村　全力を出して勝ちたいです。

3選手　ソフト部を見かけたら「頑張って」と言ってくれたら勇気が出るし、満面の笑みで返します。応援よろしくお願いします！

インカレ出場決まる　男子も

春季リーグ戦に続き第19回関東学生ソフトボール選手権大会兼第46回全日本大学ソフトボール選手権大会関東地区予選会（東京都を除く）が行われ、城西大学は新島学園短期大学に10−3と大差で勝ち、全日本大学ソフトボール選手権大会（インカレ）への出場権を獲得した。準決勝・決勝が荒天のため中止となり、ベスト4入りをした城西大学、淑徳大学、東京国際大学、山梨学院大学の4チーム優勝という形となった。

また、男子ソフトボール部も、初戦埼玉大学に14−1と大勝、続く国際武道大学戦でも延長までもつれこむ3時間半にわたる乱打戦の末に20−14で勝利しインカレ出場権を獲得した。

インカレは、8月26日〜29日に山口県宇部市（男子）、下関市(女子)で開催される。男女とも全国の舞台で「城西ソフト」旋風を起こしてほしい。

【安富英里香】

スポットライト

女子ソフトボール部　長澤淑恵監督
質を意識　効率よく練習を

2009年、監督に就任。小学校時代は少年野球をし、ソフトボールを始めたのは中学校に入ってから。強豪チームでプレーしたいという思いから高校進学時に岩手県から埼玉栄高校に入学、日本体育大学へ進んだ。ポジションはピッチャー、キャッチャー、サードを経験。卒業と同時に現役生活を離れ、2002年に発足した「レオパレス21」チームのコーチになり、6年間指導。同チームは日本リーグ準優勝を2回果たすまでに。

「ソフトボールが五輪の競技からなくなり、実業団の有力チームを進路に選んでいた高校卒業の好選手が、大学に流れていく、大学の時代が来ると興味を持っていた」。タイミング良く、本学ソフトボール部部長の武藤幸政氏（理学部、アトランタ五輪トレーナー、埼玉県ソフトボール協会理事長）から誘いがあり監督に就任した。

「量も大事だが、質を意識した効率の良い練習をしている。目標と目的は違う。目的がインカレ優勝で、そのために何をすればよいのかが目標。大事なのは目的を意識することより目標を日々の練習の中で達成できるかである。自分との約束を必ず守ることが自信につながる」。

選手に対しては、「表情や動き、挨拶の仕方などいろいろ観察してその日の様子を判断したり、気持ちの変化に気づいてあげることが大事だ」。ハワイ大学で指導した経験から「日本とは違う師弟関係に衝撃を受けた。練習は厳しく、グラウンドを出れば一人の大人として接するように意識している」。「いろいろなことが良い方向にまわり私はラッキーだ」と話す監督と深い絆で結ばれた女子ソフトのナンバー1への戦いが楽しみだ。

硬式野球部

首都大学春季リーグ
無念の最下位　秋に向け奮起を

首都大学野球リーグ春季リーグ戦（4／10〜5／23）で、城西大学は全12試合で22得点、60失点と攻守で安定感欠きリーグ最下位だった。入れ替え戦でも2部1位の大東文化大に連敗し、2部リーグに回った。

昨年、プロ野球・巨人軍で活躍した小原沢重頼監督を招へいし新体制となった城西大野球部。2年目となる今年はさらなる飛躍が期待されるシーズンだったが、出足の悪い船出となった。

課題は明白である。全試合で得点ではリーグ最少の帝京大（19得点）に次ぐ22得点。失点60はリーグワーストの記録だった。

勝利した試合はすべて1点差、敗退した試合は2試合を除き、大敗している。3位となった武蔵大に勝ち越せたのがせめての救いだった。秋は2部リーグでの戦いになるが、1部昇格に向けて奮起してほしい。「ガンバレ野球部」——全学挙げて選手たちを応援したい。

【原駿介】

戦績　12試合　3勝9敗　勝点1　勝率0.250　総合6位

試合詳細

VS東海大	VS武蔵大	VS筑波大	VS日体大	VS帝京大
●0-7	●4-5	●0-6	●2-9	○2-1
●0-10	○3-2	●4-5	●3-6	●0-4
	○3-2			●1-3

入れ替え戦（2敗）

城西大　3−5　大東文化大
城西大　1−9　大東文化大

1位 日体大／**2位** 東海大／**3位** 武蔵大／**4位** 帝京大／**5位** 筑波大／**6位** 城西大学

関東インカレ 男子1部死守 女子は総合9位

陸上競技部 駅伝部

第90回関東学生陸上競技対抗選手権大会(関東インカレ)が、5月14、15日、21、22日にわたり、東京国立競技場で開かれた。男子は1部に昇格しながら、翌年には2部に降格ということがしばしばあったが、2007年に初めて1部校に残留、それ以来4年連続で1部校を維持している。

三千㍍障害物を制した山口浩勢（経営2）＝写真中央＝により8点を獲得し、その他、男子4×百㍍リレーが5位の4点、八百㍍の小林直生(経営3)、ハーフマラソンの田村優典（経営4）がそれぞれ8位で1点を獲得し、総合得点14点、総合13位で5年連続の1部残留を果たした。

女子は一万㍍で山田美紀（経営3）が2位、後藤百絵（経営3）が6位に入り、一万㍍競歩でも大里亜梨沙（現代4）が2位と健闘した。五千㍍でも片貝洋美（医療栄養2）が5位に入る奮闘を見せた。短距離の田代成美（経営2）は、昨年百㍍、二百㍍ともに3位であったが、今年はともに6位に終わり、悔いが残った。【翁優紀】

三千㍍障害 山口2連覇の快挙

1部残留に貢献

昨年の関東インカレで1年生ながら優勝し、世界ジュニア陸上に日本代表として出場するなど、脚光を浴びた山口が今年もやってくれた。

足に軽い故障を起こすなど、良い調子で臨むことができたわけではなかった。レースは多くの選手がけん制し合うダンゴ状態での展開であった。調子が悪い中、冷静に勝機をうかがう落ち着いたレース運びで、ラスト2周を残すあたりからじわじわと山口が抜け出し、集団が長くなっていく。最後は危なげないスパートで他を振り切って優勝。

「調子も良くない中、自分らしいレースができたと思います。1部残留にこだわらず、1種目でも多く入賞、優勝できるようなチームにすることが目標」と、エースとしての自覚も芽生えている。【千葉史典、翁優紀】

4×百㍍リレーは悔しい5位

お家芸であり、3冠(関東インカレ、日本インカレ、日本選手権リレー)を目指す4×百㍍リレーでは、決勝進出するものの、実力を出し切れず5位に終わった。本塩遼(経営3)が故障したことにより、エース抜きで臨んだが、それでも10秒48の矢野祥伍（経営4）、10秒51の新人本間圭祐、10秒57の今泉真人（経営4）、10秒6前半のベストを持つ鈴木一磨（経営4）と澁谷勇佑(経営4)の有力メンバーが揃った。

予選では、鈴木、矢野、本間、澁谷のオーダーで危なげなく通過し、決勝はシードレーンの3レーン。決勝は、スタートから予想通り中大がリードする展開。城西は3か所あるバトンゾーンで小さなミスを重ねた。4走の今泉は、直前まで走り幅跳びの競技中であり、疲労で後半の伸びを欠き、5位に順位を下げてゴールした。

「少なくとも3位は狙えるメンバーだった。リレーでは秋の日本インカレと日本選手権でリベンジを果たしたい」と土江寛裕監督。【恩田香里】

女子駅伝部エース山田 一万㍍で2位

一万㍍では、「杜の都駅伝」でエース区間を走った山田美紀（経営3）＝写真右＝がスタート直後から先頭に飛び出てレースを積極的に引っ張っていた。1000㍍を3分20秒前後のペースで進んでいったレース展開が変わったのは5000㍍過ぎ。後藤百絵（経営2）が前に出て集団のペースを上げ、人数をばらつかせるための振り落としに仕掛けていった。

7000㍍すぎで城西国際大4年の中村、中央大1年の篠塚がペースを上げて一気に集団が割れ、優勝争いは山田と篠塚となったが、ラスト1㌔で篠塚がスピードに乗り、優勝。山田が惜しくも2位だったが後藤も6位で入賞を果たし、昨年は故障に苦しんだ主将の井上藍(現代政策4)が、10位と城西大の層の厚さを証明した。

山田は「練習を十分に積めていない中でのレースでしたが、学ぶことや自分の弱さを見つけれました。これを生かして、来年こそは優勝を目指して努力していきたい」と、語っていた。【翁優紀】

女子五千㍍で片貝が5位

五千㍍では、序盤、佐野知美（経営1）が先頭集団に混じり、堂々とレースに挑んでいた。3000㍍すぎから集団がバラバラになり、ラスト1㌔で片貝洋美（医療栄養2）が徐々に前をくっていき5位でフィニッシュした。今大会2種目目の後藤も11位でゴールし、佐野も15位でゴール。

片貝は「反省点の多いもったいないレースをしてしまった。この反省を次につなげるように頑張っていきたい」と話した。【翁優紀】

新人に厳しい洗礼は

男子駅伝部に入部し、春先から五千㍍を13分台で走って絶好調だった村山紘太（経営1）は、14分32秒69の21位。「一年生なので、失敗を恐れないように走ろうと思ったが、課題の残る走りであった。次の大会で関東インカレの課題を生かし、結果を残したい」と語った。

世界ユース五輪銀メダルを獲得した本間圭祐（経営1）も、関東の学生陸上のレベルの高さを前に結果を出せなかった。得意の二百㍍では準決勝に進出したが、後半の伸びを欠き、決勝進出を逃した。

「高校とのレベルの違いに驚いた。4×百㍍リレーではリレーメンバーの先輩たちのおかげで自分らしい走りをすることができた」と話す。

女子の短距離、赤司かずみ（経営1）は、百㍍に出場し、スタートダッシュを生かして準決勝に進出。準決勝はスタートでリードしたが、後半力みが出て失速し7着で落選した。

赤司は「初めて関東インカレに出場し、各校の応援などの雰囲気に呑まれてしまった。次の日本学生個人選手権、埼玉県選手権につなげていきたい。今度こそ11秒台で走りたい」と前向きであった。

五千㍍に出場した女子駅伝のルーキー佐野知美（経営1）は、不本意なタイムに終わり学生女子長距離のレベルの高さを身を以って感じる結果になった。しかし、「代表として出場できて嬉しかった。他校の選手や先輩方から良い刺激を受けて、もっと自分の走りを磨きたいという気持ちになりました」と今後に向けて頼もしく語った。

なるほど豆知識

なぜ1部、2部制？

16校が1部校に属している。全国から多くの有力選手が集まるため、抜群にハイレベル。毎年、1部校の15位、16位と2部校の優勝校、準優勝校とが入れ替わる。今年の1部校は早稲田、東海、筑波、日大、中大、国士舘、順大、法政、慶應、山梨学院、日体大、東洋、明治、大東文化、国際武道、そして城西の16校。1部校の総合順位が、正月の箱根駅伝の予選会での「インカレポイント」として、タイムが減算されるため、箱根駅伝への切符獲得に向けても非常に重要な大会といえる。女子にも1部校、2部校があるが、2部は大学院のみで、昇格降格による入れ替えはない。

三千㍍障害物とは？

三千㍍を走る間に、障害物と呼ばれる高さ91.4㌢㍍のハードル状の障害物を28回、水濠と呼ばれる障害物を7回越えてゴールする。水濠とは、ハードルを越えた所に長さ3㍍66㌢、深さが最大で70㌢㍍あるプール状の濠のある障害のことである。ヨーロッパである村の教会から別の村の教会まで、塀や柵を跳び越えながら競走したのが起源といわれる。城西大駅伝部の櫛部静二監督は、この種目の元高校記録保持者である。

記者の目

Jスポ読んで応援を

4月に発行した新入生歓迎特別号に掲載するため女子ソフトボール部を取材していた時のことだ。

「大会で優勝して、次の城西スポーツ新聞に大きく取りあげましょう！」と話した。その言葉通り、すぐに優勝という結果を出してくれ、担当記者としてこんなに嬉しいことはない。他の運動部もたくさん良い結果をだして紙面を賑わせてほしい。

私は、この城西スポーツ新聞に携わるまで、恥ずかしながら自分が在学している大学なのにこんなに多くの学生が一生懸命活動していることを知らなかった。やはり、情報というものは自分が知ろうとしなければ入ってこないものだと思う。情報が入れば応援をしたいという気持ちが大きくなり、応援された運動部の部員はもっと頑張ろうという気持ちになり良い結果につながるだろう。だから、多くの人に城西のスポーツについて知ってもらいたい。この新聞が役立てば幸いだ。【安富英里香】

■取材スタッフ
編集長　経営学部4年　千葉　史典
副編集長　経営学部3年　原　駿介
経営学部4年　安富英里香
経営学部3年　寺田　登
経営学部3年　翁　優紀
経営学部3年　恩田　香里
写真　現代政策学部4年　宮内　智史
経済学部2年　入江　遼

■監修・アドバイザー
副学長　草野　素雄
経営学部准教授　土江　寛裕
経営学部助教　山口理恵子

■記者募集
記事を書いてみませんか。新聞記者経験がある職員が取材・書き方を基本から指導します。留学生も歓迎です。写真、イラスト、漫画などで協力してくれる学生も、ぜひ参加してください。
連絡はこちらまで。josaisports@josai.ac.jp

Jスポ WEB 版近日公開!! www.jsai.ac.jp/~jspo/

観光学部 軟式野球部

城西国際大学

愛媛から寮生活で一丸

千葉県鴨川市の安房キャンパス。ここの観光学部軟式野球部は、生まれたてのフレッシュな運動部だ。部員は、2年生7人、1年生16人。東関東軟式野球連盟のリーグ戦に初めて出たのが昨秋。連盟には観光学部軟式野球部や城西国際大学（東金）、順天堂大など6チームが参加している。昨秋は、3勝2敗で3位、今春も3勝2敗の3位。2年生が最上級生のチームとしては、健闘したといえるだろう。

全体練習は、週4日で鴨川市の協力で市営球場を使用している。自主トレーニングでは、浜辺でのランニングなどで鍛える。キャンパスは丘の上にあり、国道交差点から片道約2㌔の「急坂ランニング」は軟式野球部名物である。

名前	学年	出身高
植松健有	2	松山商業高
青木祥幸	2	松山城南高
伊出博樹	2	松山城南高
大橋遼	2	松山城南高
久保徹	2	松山城南高
高石嵐時	2	大洲農業高
高崎翔平	2	大洲農業高
今井和哉	1	丹原高
宇都宮敬士	1	宇和高
岡本和樹	1	北条高
越智啓介	1	小松高
加藤嘉一	1	松山商業高
葛本一利	1	宇和島東高
清水源治	1	北条高
仙波勇輝	1	北条高
田井能政男	1	新田学園高
長利憲汰	1	宇和島南中
原山雄光	1	弓削高
宮下昂輝	1	南宇和高
雪大地	1	新潟市立東京学館新潟
若松優一郎	1	吉田高
庄子優花（マネージャー）	2	尚絅学院高
有馬真衣（マネージャー）	1	松山城南高
黒田直樹（兼マネージャー）	1	松山城南高

部員のほぼ全員が愛媛県の高校の卒業生だ。高校時代に硬式野球をやっていた部員も多い。全員、寮生活でチームワークは抜群だ。

河上國男顧問（71）は社会人野球の経験が長く、いまも「現役コーチ」で部員相手にノック練習も。「バント戦法は極力、取らない」がモットーという。

主将の植松健有は「軟式と硬式では、ボールの弾みが違う。グラブの使い方も違う。軟式の方が楽しく奥が深い」と話す。

心強いのは、ご父母たちの支援。黄色いTシャツがユニフォームだ。その〝応援団〟の名前は「ソフト・マザーズ」。8月初旬に愛媛県鬼北町で行われる夏季キャンプでもバックアップする。